

# 謫考

瀬川敬也

## 〔抄録〕

秦漢時代に動員された謫は、その語義に「罪」の意味があることから、罪人であったという見解が一般的であるが、実際のところその実態は不明確なままであるといつてよい。それは史料上の限界とともに、問題の性格上不可欠である法制的論証手続きが不十分であることに原因があるものと考えられる。したがって本論では、法制、とくに刑罰制度から謫にアプローチを試み、謫が刑罰規定に照らし合わせれば、法的「罪人」とは異なる存在であることを明らかにするとともに、居延漢簡にみられる謫の事例か

ら、謫の実際の意味が過失とそれに対する懲罰以上のものではないことを探る。また謫該当者には二種類の要素があり、大部分の該当者は、農民のように国家的必要業務を負担しない人々であることから、国家政策としての謫動員の主要な意義は、農民以外に国家的必要業務負担者を把握してゆくことを論証してゆく。

キーワード…謫、刑罰、罪人、過失、懲罰労働

## はじめに

秦漢時代に一時的に謫という名称を冠せられた人々が強制的に徴発、動員された。この謫に対する評価は、現在のところ罪人を意味するかどうかで大きく分かれているようである。このように評価が正反

対に分かれるのは、今までの謫理解の方法に何らかの欠陥があったものと考えられる。そこで本稿では、法規定、ことに刑罰制度の観点から謫を再評価し、罪人といえるかどうかを再検討してゆく。加えて居延漢簡にみえる謫吏の事例から、謫の本来の意味を明らかにし、その実態に迫ってみたいと思う。本稿では秦漢両時代の謫を扱うわけであ

るが、漢は多く秦制を受け継いでいること、両時代の謫の該当者はほぼ重なることなどから、両者が基本的に同じ性格のものであるという前提のもとで論を進める。なお本文中では史料上謫・適と標記されているものも全て謫に統一して標記する。

## 第一章 問題点の整理

史料にみえる秦漢時代の謫動員の事例を時代を追って列挙すれば、以下のとおりになる。まず秦では、

A 三十三年、発諸嘗逃亡人・贅壻・賈人、略取陸梁地、為桂林・

象郡・南海、以適遣戍。（『史記』秦始皇本紀）

B 西北斥逐匈奴、自榆中並河以東、屬之陰山、以為三十四県、城

河上為塞。又使蒙恬渡河、取高闕・陶山・北阪中、築亭障以逐戎

人、徙謫、實之初県。（『史記』秦始皇本紀）

C 適治獄吏不直者、築長城及南越地。（『史記』秦始皇本紀）

D 益發謫徙辺。（『史記』秦始皇本紀）

E 二世元年七月、發閭左、適戍漁陽。（『史記』陳涉世家）

があり、史料A・Bはともに始皇三十三年（前二一四）、史料Cは三十四年（前二一三）、史料Dは三十五年（前二一二）、史料Eは二世皇帝の元年（前二〇九）のことである。鼂錯はこれら秦の謫動員の事情を、

F 臣聞秦時北攻胡貉、築塞河上、南攻楊粵、置戍卒焉。…秦之戍卒不能其水土、戍者死於辺、輸者償於道。秦民見行、如往棄市、

因以謫發之、名曰謫戍。先發吏有謫及贅壻・賈人、後以嘗有市籍者、又後以大父母・父母嘗有市籍者。後入閭、取其左。發之不順、行者深怨、有背畔之心。（『漢書』鼂錯伝）と説明している。その後秦の謫は、

G 蒙恬死、諸侯畔秦、中国擾乱、諸秦所徙適戍辺者皆復去、於是匈奴得寛、復稍度河南与中国界於故塞。（『史記』匈奴伝）

と、秦国内の混乱によって逃亡してしまったようである。そして漢武帝期になってから謫は再開された。

H 發謫吏穿昆明池。（『漢書』武帝紀）

I 秋八月、行幸安定、遣貳師將軍李広利、發天下謫民、西征大宛。（『漢書』武帝紀）

J 發謫戍屯五原。（『漢書』武帝紀）

K 發天下七科謫及勇敢士、遣貳師將軍李広利、將六万騎・歩兵七万人、出朔方。（『漢書』武帝紀）

史料Hは元狩三年（前一二〇）、史料Iは李広利による第一回大宛遠征のあった太初元年（前一〇四）、史料Jは天漢元年（前一〇〇）、史料Kは李広利による匈奴遠征のあった天漢四年（前九七）である。

そして史料Kの七科謫の記事に対して、張晏はその対象者を、

L 吏有罪一、亡命二、贅壻三、賈人四、故有市籍五、父母有市籍六、大父母有市籍七、凡七科也。

と解説する。

これら謫に関してはすでにいくつかの専論があるが、いずれもその実態の決定的な解明がなされぬままに議論が放置されてしまった感が

ある。とはいふものの、現状では、謫は刑罰的処置であり、謫該当者は罪人であるという見解が暗黙のうちに常識化していると思われる。その原因を考えると、ざっと以下のものがあげられよう。

まず第一に謫という字の語義である。謫には「罪」あるいは「譴責」と伝統的に解釈されている。<sup>(2)</sup>したがってこの名を冠して動員される人々は、当然罪人であるという認識が導き出される。歴代注釈家の注釈もみなこの語義を論拠としており、例えば、史料Hにみえる「謫吏」とは、顔師古の注釈では「謫吏、吏有罪者、罰而役之。」と、罪あるがゆえに罰として動員された吏と解釈されている。また西嶋定生氏が七科謫該当者を、

七種の罪人という意味であるが、その内容は当時の罪人観を示すものとして注目される<sup>(3)</sup>

と表現したのも、おそらくは謫の語義を敷衍した結果の見解であろう。このように従来の議論はおおむね謫の語義を出発点としており、その多くは謫該当者は罪人であるということを無意識に前提としたものになっている。そしてその上で謫該当者にはいったどのような犯罪行為があったのか、またはなにが罪となるのかを証明することに議論が集中するという、いわば本末転倒に陥った論証となっている。

次にあげられる原因は、謫該当者が一般の戌卒あるいは一般の庶民から区別された存在であるという点である。秦の謫戌を説明した史料Fの最錯の言に、「秦民行くを見ること棄市に往くが如し、謫を以てこれを発する因て、名づけて謫戌と曰う」とあり、謫として動員された人々は、一般の民による戌卒と別次元で把握されていることが読み

取れる。また漢の武帝時代、李広利による二度目の大宛遠征の時に動員された人々の中でも、

M 以適過行者、皆絀其勞。（『史記』大宛伝）

と、謫過によって従軍した者は、外の者並の恩賞にあずからなかったとある。これらのことから謫該当者は、当時にあつては一般庶民並に扱われない存在、つまり差別された存在であつたとの見解があらわれた。<sup>(4)</sup>さらに堀敏一氏は、唐代のような明確な良賤制のなかった当時、賤民は罪人と同一視されたとし、氏はこのことを謫の語義と結び付け、彼らに謫の名が冠せられる理由を、

身分的に差別されるものが、当時の一般人から罪あるものとみられても不思議ではないように思う<sup>(5)</sup>

と説明するのである。罪あるものが差別されることは、秦漢時代の刑徒がいわば犯罪奴隷として扱われていた点からも納得がゆく。しかしだからといって逆に差別されるものが罪人として扱われるということになるのだろうか。この点論理に飛躍を感じざるを得ない。

もう一点は、彼らが刑徒と同様に強制的に戦闘や就労に動員されていることである。秦漢時代においては刑徒を兵卒として徴用することがままあつた。たとえば、

驪山徒多、請赦之、授兵以撃之。（『史記』秦始皇本紀）

というような例は、罪人を動員したものと理解して差し支えないであろう。しかし強制動員される対象は罪人には限られないのであり、兵役や労役に徴用された一般庶民もそこには含まれるのである。<sup>(7)</sup>つまり戦闘や就労に強制動員されること自体は罪人の指標にはならないとい

うことである。<sup>⑧</sup>

以上あげたような原因により、謫該当者は罪人と目されるのであらうが、いずれも積極的な証拠たりえないことは、大まかにではあるが同時に述べた。なかでも第一にあげた語義の問題は、謫の実態を離れ、短絡的かつ不用意に結論を導き出す危険性があり、議論の出発点にすべきではない。そしてなによりも謫該当者を罪人とするならば、当時の罪ないしは罪人とはそもそも何を意味すべきものなのかを確認することが最も基本的で重要な作業となるはずであるのに、従来の議論はそれが不徹底であるか、もしくは放棄していることも重大な欠陥と言えよう。罪人であるといいながら、なぜ罪人なのか合理的に説明できない従来の説は、すべてこれらの点に起因するのである。したがって以下ではまず当時の罪あるいは罪人という語の概念規定を行う。そのうえで謫該当者が罪人と言えるかどうかを改めて考察してゆきたい。

## 第二章 罪人とは何か

まず罪という語であるが、身分的に差別されるものが、当時の一般人から罪あるものとみられたとする堀氏の見解は先に紹介したが、氏の見解に対しては、専制国家発生以降の中国において、一般人の通念が直接的に罪を認定しえるのが最大の疑問となる。氏はさらに、その人物が社会の現存秩序に反するといういみでツミと観念されているのではないかと考える。<sup>⑩</sup>

という。総合すると氏の論では、国家との関係からではなく、一定の

人物を共同体内の通念に反するという理由で共同体の成員から排除するという罪と刑罰の原始的形態によって罪人を説明するものである。

しかし氏の用いるような罪の概念は、法共同体の存在が前提条件であり、戦国時代以降中間団体を排除しつつ形成された専制国家の体制<sup>⑪</sup>とは相いれないものである。つまり専制国家においては、法は皇帝を中心とする国家に独占される方向に向かい、社会は極端に非政治化されてゆくため、国家以外に公的に罪を認定するような機関は存在し得ないはずである。<sup>⑫</sup>同時にそのような国家では、非国家的刑罰権を認めないため、国家による以外の制裁は基本的に刑罰とは異なるものである。したがって謫が国家によって動員されている以上、その対象者が国家以外のレベルで罪人とされたからであるという説明は意味をなさないのである。罪と罪人とは、国家のみによって認定されるものとせねばならないであろう。<sup>⑬</sup>とすれば、まず謫該当者を罪人とするためには、彼らの行為が国法に触れるという前提がなければならない。そして罪人である以上は当然国家により一律に科罰されるはずであるから、謫該当者が罪人であるとすれば、謫としての動員は罪にたいする科罰、あるいは刑罰を赦免した結果の動員と考えねばならないであろう。以上のことが謫に関する記事と照らし合わせて当てはまるかどうかをみるのが次の作業となる。

まず第一に彼らを罪人とするならば、彼らに国法に触れる明白な犯行為がなければならない。史料上の張晏の列挙する謫該当者のうち、「吏有罪」と「亡命」についてはまだその可能性が残されているのでここではしばらくおくとして、「贅壻」、「賈人」、「有市籍者」お

よび史料E・Fにある「閭左」はどうであろうか。彼らはその存在自体が謫として動員される理由となつていたのであつて、何らかの行為が理由となつてゐるのではない。では存在そのものが罪となりえるのだろうか。「有市籍者」のように国家によつて把握される人々を非合法な存在とすることはできないであらう。まして「父母」、「大父母」が市籍にあつたことが罪となるなど考えられないことである。また彼らが謫から解放されるとして、後に再び以前あつた状態に復帰すればどうなるのか。たとえば「賈人」は解放後も恐らくもとの職業に従事するであろうから、その存在を罪とするならば、謫は国家意志の遂行という目的を達成し得ない制度となつてしまおう。

次に謫の特徴としてあげられることは、秦漢兩時代をつうじて数度しか動員されていないことなどから、恒常的なものではなく、必要時に臨時に動員されるものであつた<sup>13</sup>ということである。では謫を刑罰であると仮定した場合、謫該当者は動員の必要がくるまで刑の執行を猶予されていたのであろうか。いつくるとも知れぬ非常時のために罪人を放置し続けるなどとはどうてい考えられないことである。また刑罰であるならば、少なくとも漢代文帝以降には刑期が設定されているので、彼らの就労は期限付のはずである。しかし武帝期の謫の記事にも期限らしきものはあらわれていない。むしろ史料Mの例から、任務終了まで就労し続けた可能性のほうが高いと考えられる。では彼らは刑徒であつたが、赦免されたうえで動員されたのであろうか。史料A・Fそして史料H・Kの謫動員の記事では、彼らが赦免という手続きを経た形跡はなく、直接動員されている。さらに「かつて罪があつたが

当時獄に入つていない<sup>16</sup>」という説明もあるが、「かつて」ということは、動員の時点ではその罪は消失していることにならう。となれば刑期を満了した刑徒は「皆免為庶人」(『漢書』刑法志)と、もはやその過去の経歴は問われないはずであるから、前科が科罰の対象になることもありえない。したがつて謫該当者を刑徒または元刑徒であつたとすることは、刑罰制度上からみても不可能なのである。

以上のように、彼らが犯罪者であるがゆえに謫として動員されたと考えることは、法制の面からみれば否定されざるを得ないのである。では謫とはいつたい何を指す語なのであろうか。以下先ほど保留した「吏有罪」を手掛かりに、居延漢簡にみえる例を通して考えてみたい。

### 第三章 居延漢簡にみる謫の事例

張晏が「吏有罪」としたものは、応劭注によると「吏有過<sup>17</sup>」とされている。いずれも史料Hの、「謫吏を發して昆明池を穿たしむ。」とあるこの「謫吏」を指すと考えられる。この記事に対する顔師古注は、謫吏、吏有罪者、罰而役之。

と、張晏と同様の解説である。謫の語義と、これらの解説に依る限りでは、「謫吏」を犯罪行為のあつた吏と理解することができようが、本稿で確認した罪の立場から見れば、「謫吏」を国家による科罰の対象となる犯罪者＝罪人と規定できるかどうかは疑わしいと思う。そこで居延漢簡にみえる謫(適)の用例から、その用法と「謫吏」の実態とを考えてみたい。

居延漢簡にみえる謫の用例は少なくなく、近年佐原康夫氏により一通りの整理が行われている。<sup>18</sup>そこに列挙された事例の一部をあげると、<sup>19</sup>

① 鉗庭候長王護 坐隊長薛隆誤和受一荳火、適載軋一兩到□<sup>20</sup>  
E P T 六五・二二八

② 第十候長秦忠 坐部十二月甲午留黨、謫載純赤董三百丈致<sup>21</sup>  
A 8 二六二・三二

A 8 二六二・三二

③ 万歳甲長田宗 坐発省治大司農菱卒不以時、遣吏將詣官失期、

適為駅馬載三樵菱五石到止害 A 8 六一・三、一九四・一二

④ 第十候長傳育 坐発省卒部五人、会月十三、失期母状、今適載

三泉菱二十石、致城北隧給駅馬、会月二十五日畢 E P T 五

九・五九

⑤ 坐閏月乙卯官移府行事撤留退三時九分、不以馬行、適為戌卒

城倉軋一兩致官、会月十五日畢 E P T 五九・九六

⑥ 長甲 坐君行塞弩五関戻□緩、適車<sup>22</sup> A 3 3 四〇三・一

五

⑦ 坐移正月尽三月四時吏名籍、誤十事、適□里 A 8 一八

五・三二

⑧ 第十候史楊平 罷卒在正月四日到部、私留一日、適運菱五百束

致候官、会八月旦 A 8 二八五・一〇

⑨ 坐勞辺使者過郡飲、適塩卅石輸官 E P T 五一・三三三

などがある。①・②は信号伝達の不備、③・④は期日の遅延、⑤は書

類送付の遅れ、⑥は弩の整備不良、⑦は書類の書き間違い、⑧は「罷

卒」の足止め、⑨は飲み過ぎと、いずれも職務上の失態や過失に対す

る懲罰労働であり、その内容は、ほとんどがその時の必要に応じた運送労働への従事である。またこの他にも、実際には懲罰労働に従事することなく、

□黨、為解母状当教、以新除故、請財適三百里以戒後 E P T

五・六

のような一種の罰金処分と思われる「財適」というものもみえる。佐原氏はこのような処分を、

居延都尉府管内でのローカルルールとして、このような罰則や軽

減措置がもうけられていたのだらう。<sup>20</sup>

とするのであるが、筆者も「謫吏」の処分が都尉府の自由な判断で、時々に応じて下されている点から、これを国法に則った刑罰処置とは考えにくいと思う。もし彼らが犯法行為のあった罪人であるとすれば、彼らに対する処分も国法に規定のある形で一律に執行されていなければならない。しかし居延漢簡の用例から見ると、謫とは職務上の責任の及ぶ範囲内で犯した過失と、それに対する職場内でのペナルティ<sup>21</sup>懲罰以上の意味をもたないものである。李均明氏も、

漢簡にみえる適は、官吏の犯した行政上の過失に対する一種の処罰であり、その過失は通常犯罪のレベルには達していないものである。しかしそれは官吏の勤務成績に影響を与えるものではない<sup>22</sup>。

と居延漢簡の謫を解釈している。さらに『魏書』刑罰志では、漢代の謫に関して、

漢武時始啓河右四郡、議諸疑罪而謫之：帝王之於罪人、非怒而誅

之、欲其徙善而懲惡、謫徒之苦、其懲亦深、自非大逆正刑、皆可從徙。

という記事があり、上奏者游雅によると、謫されるものは「疑罪」と表現されているとともに、「謫徒」と正刑は別のものであるという認識のあったことが窺える。これも彼らを罪人と即座に規定できないこととのあらわれである。以上から謫とは、国家レベルで判定される罪ではなく、その対象者も法的手続きを踏んで認定された罪人とはいいたいと思うのである。したがって罪の意味をもつ謫の名を冠して呼ばれる「謫吏」なども、それを一概に罪人と認定することはできないであらう。「吏有罪」と「吏有過」は、ニュアンスは似ているかもしれないが、厳密には後者の意味で理解しなければならないのである。

「謫吏」は厳密には罪人（「吏有罪」）ではないという結論に達したが、しかし過失のあった官吏（「吏有過」）は名籍に記録が残し、一度に処分し終わらないものは、その記録に照らして必要時に懲罰を労働等で償却していったと考えられる。過失が名籍に記録として残されることは居延漢簡に、

□□未尚有適過為官□□<sup>22</sup>

EPS四T一・二四

という簡がみえるためおおその見当がつく。また『漢書』游侠伝に、

故事、有百適者斥

とあることから、その記録がかなり詳細であり、複数の過失が累積していくことも窺える。そしてこのような記録に照らして「謫吏」の動員されることが、

甲渠官 李充印

十一月壬午卒便以来

A 8二五八・一八(A)

召發適吏

A 8二五八・一八(B)

とあることから分かる。この簡から佐原氏は、

恐らく都尉府から「謫吏」を徵発する命令が来たことがわかる。

謫吏の待機リストのような名籍から、必要に応じて労働力が調達されたのだらう。<sup>23</sup>

とする。この指摘と先程の『漢書』游侠伝の記事とを考え合わせると、過失のあった「謫吏」は、その都度懲罰労働に従事するのではなく、ある程度たまるまで待機させられ、まとめて一度に償却させられたのであらう。この点も謫が刑罰ではないことを反映するものである。罪人を複数の罪が累積するまで待機させるとは考えられないことである。そして平時においては、その就労内容は都尉府管内での必要労働であつたろうが、国家に非常事が発生した時には、中央が彼らを一か所で就労させたのであらう。史料Hにある「謫吏」を徵発して昆明池を掘らせたという記事は、まさにこのような非常時の処置であつたと考えられる。そしてこのように考えれば、謫が臨時に動員されていることにも説明がつくと思う。また史料Fに、「謫を以てこれを發するに因て、名づけて謫戍という。先に吏の謫有るもの及び贅増・賈人を發し」と記されていることから、謫戍の名称は謫を徵発することから付けられたものであり、その第一の対象となつたのが「吏有謫」Ⅱ「謫吏」であつたことが分かる。つまり謫戍とは、謫過のあった吏などを戍辺等の目的で中央が一括徵発したことがその起源となる

のであろう。この他にも秦代で吏を謫として動員した例に、史料Cの「治獄の吏の不直なる者を適し、長城及び南越地に築く。」というものがある。ここではその対象が「吏不直者」に限定されているが、内容は武帝紀の謫吏の徵発と類似している。そして秦代でも漢代同様職務上の過失のあった官吏が名籍に記録されたことは、雲夢秦簡「語書」に、

…令丞以為不直、志千里使有籍書之、以為患吏。 語書（二〇

頁）

と記されている。以上から謫とは、本来は職務上等の過失を名籍上に記録し、刑罰の枠外で個々の過失に対応した懲罰を加えるものであり、平時では当該機関の管内で完結していたものが、やがて国家的必要に応じて中央がペナルティリストを吸収し、一括動員するようになったものと説明できる。そして国家規模の動員となった後も、引き続き当初からの名称である謫が用いられたのであろう。また彼らは過失Ⅱ謫過あるがゆえに動員されているのであるから、史料Mにあるように恩賞にあずかれないことも納得がゆこう。

ところで「謫吏」は、犯した過失の記録に照らして徵発されたが、このように何らかのマイナスポイントが記録される例は外にもある。それは租税あるいは徭役負担を滞納し、逃亡したものに對してである。雲夢秦簡「封診式」に、

覆…可定名事里、所坐論云何、何罪赦、或覆問無有、凡籍亡、亡及逮事各何日…（二五〇頁）

と、滞納、逃亡がそれぞれ何日あるかを名籍に記録させている。この

ように滞納分の日数が記録されているということは、いずれ何らかの形でそれらの滞納分を返済させる用意があったのであろう。それが「謫吏」と同様に非常時に一度に動員されたのではないだろうか。史料Aには、「嘗て逋亡の人、贅壻、賈人を発し、」と、「嘗て逋亡人」が徵発されたとある。ここでも「嘗て」とあること、「封診式」にあるように当面は名籍に記録するに止め、即徵発しないことから、「謫吏」と同様必要時まで待機させていたことが分かり、この点から「嘗て逋亡人」も罪人とすることは困難であると思う。また史料Jの張晏注には「亡命」があげられている。この「嘗て逋亡人」と「亡命」が同じものを指すかどうか議論が分かれるが、筆者は、いずれも国家に対する必要業務を滞納し、それに対して責を負う者であり、そのことが彼らが謫として徵発された理由なのであろうと考える。『漢書』文帝紀二年春正月に、

詔曰、夫農、天下之本也、其開藉田、朕親率耕、以給宗廟粢盛。民譴作畋官及貸種食未入、入未備者、皆赦之。

と、公に負債のあるものとともにあげられている「謫作」に従事しているものは、まさにそのような人々を指しているのであろう。

以上のように謫は、もともととは官吏等が犯した過失に対する当該機関内での懲罰を意味していたものが、やがて非常時に中央に吸収され、一括動員されるようになったものであった。そして「嘗て逋亡人」も、未納分の徭役等を謫吏と同じく非常時の労働に従事することによって返済させたのが謫として一律に動員された理由である。ではこの「謫吏」、「嘗て逋亡人」以外にあげられている該当者はなぜ謫として



動員されたのであろうか。私見では、他の該当者の性格はこの両者とやや異なっていると思われるのである。それは彼らには過失という積極的負の要素もないからである。よつて以下ではその性格と徴発の理由を考察してゆきたい。

#### 第四章 謫のもう一つの意味

謫該当者には「謫吏」、「嘗逋亡人」以外に「贅壻」、「賈人」、「嘗有市籍者」、「父母有市籍者」、「大父母有市籍者」、「閭左」があげられている。これらの人々を罪人とすることができないことはすでに述べた。また彼らは何らかの行為があつたために徴発されたのではなく、

その存在が徴発の対象となつてゐることから、「謫吏」のような過失という要素もそこには見いだせない。では彼らはなぜ謫の徴発対象となつたのであろうか。その原因を探るでたとして、まず彼らの共通点としてあげられるのは、彼らの多くは国家的必要業務の担い手である一般農民ではないということである。たとえば「有市籍者」が兵役を免除されてゐたことは、美川修一氏、渡部武氏によつて指摘があり、商人が租税の負担をおこなつてゐなかつたことは、『漢書』貢禹伝に

商賈求利東西南北、各用智巧、好衣美食、歲有十二之利、而不出租税。

とある。ただ「贅壻」、「閭左」は、その実態がほとんど不明であるので即断はできないが、しかし彼らが一般の農民から區別されてゐたこ

とだけは確かなようである。雲夢秦簡「魏戸律」に、

廿五年閏再十二月丙午朔辛亥、告相邦。民或棄邑居壻、入人孤寡、徹人婦女、非邦之故也。自今以來、段門逆呂、贅壻後父、勿令為戸、勿亂田宇。三葉之後、欲士、之、乃署其籍曰、故某慮贅壻某叟之乃孫。 魏戸律（二九二頁）

とあるように、「贅壻」は一般に戸籍につくことができず、田宅の所有や仕官に制限が加えられている。また「魏奔命律」には、

廿五年閏再十二月丙午朔辛亥、告將軍。段門逆闕、贅壻後父、或從軍、將軍勿恤視、享牛食士、賜之參飯、而勿鼠殺、攻城用其不足、將軍以埋豪。 魏奔命律（二九四頁）

と、彼らが一般農民並の義務を果たしてゐないことが、區別される理由であることが分かる。榎山明氏もこの点について、

彼等は戍卒をはじめとする徭役を担い得ず、またその期待もされない人々、換言すれば国家の共同業務の担い手たり得ない身分なのではないだろうか。<sup>(28)</sup>

との見解を示す。つまり彼らは、そもそも国家に対して義務を果たすべき存在ではなかつたことが謫として徴発される原因と考えられるのであつて、罪あるいは過失あるがゆえに動員されたとみることができないと思う。したがつて「閭左」も、徭役復除の対象者であつたという理解が妥当であらう。<sup>(29)</sup>

もう一点注意しなければならないことは、謫該当者の範圍が順次段階を追つて広がつてゐること、つまり当初から謫民という固定した身

分が存在していたのではなかったということである。前述のように、謫該当者には過失等によって懲罰を課せられたものと、国家に対して義務を果たしていないものの二種類があった。前者は謫本来の形態の発展形であり、謫過あるものが動員されたために謫という名称がつけられた。問題は後者の場合である。史料Fには、「先に吏の謫有るもの及び贅壻・賈人を発し、後嘗て市籍有る者を以てし、又た後大父母、父母嘗て市籍有る者を以てし、後閭に入り、其の左を取る」と、徴発の範囲がしだいに広げられていったことが読み取れる。つまり彼らは徴発される以前は謫民とは見なされてはいなかったものであり、このことから彼らは、謫民であるから徴発の対象となったのではなく、徴発されることによってはじめて謫と呼ばれたといえるのである。とすれば彼らが謫民という身分的に差別される人々であったがゆえに徴発の対象となったとすることもできないのである。ではこれらのことから何が説明できるであろうか。以下謫を通じて国家の側からその目的を考えてゆきたい。

## 第五章 謫動員の原因とその契機

まず第一に考えられるのは、謫は、「謫吏」の例のように今まで地方官等の機関に保持されていた懲戒の権限を中央が随時独占的に吸収しうる制度であるということである。法の条文に明確な規定のある罪に対しては、法の条文に照らして一律に断罪されていたが、規定の程度にまで達しないものについては、一般に中央の手を経ずに処理され

ていたであろう。それを中央に組み込むことにより、国家の必要労働を負担させようとしたのではないだろうか。また一方では、中央以外の懲戒権を抑制することをも目的にしたのかもしれない。

そしてもう一点、謫該当者の多くが一般農民のように国家の必要労働を負担しない人々であったこと、そして徴発の範囲が徐々に拡大していることから、謫は、農民以外に大量徴発できる集団を国家が順次取り込んでゆく過程であると考えられるのである。彼らがそれぞれ名籍によって区別されていることは、雲夢秦簡「魏戸律」に、

：自今以来、段門逆呂、贅壻後父、勿令為戸、勿鼠田宇。三葉之後、欲士、之、乃署其籍曰、故某慮贅壻叟某之乃孫。 魏戸律

とあり、また『史記』平準書に、

賈人有市籍者、及其家屬、皆無得籍名田、以便農。敢犯令、没入田儻。

とあることから分かり、さらに「有市籍者」の対象者が「父母」、「大父母」にまで及んでいることから、彼らをその従事する職業や立場によって区別し、代々固定することによって農民以外の国家に対する必要業務負担者として登録していったと思われるのである。とすればむしろ謫には、国家による人民把握の徹底、国家的必要業務負担者の範囲の拡大をその背景に見いだすことができるであろう。

謫が臨時に動員されていることはすでに述べたが、ではそこには一体どのような契機があったのであろうか。結果からいえば、秦漢いづれの場合も对外政策とそれにもなう人員の大量動員の必要性が浮かび上がってくるのである。そのうち最も重要なのは戍辺期間の問題で

ある。史料Fの鼃錯の言には、続けてこの事情を、

：然令遠方之卒守塞、一歲而更、不知胡人之能、不如選常居者、家室田作、且以備之。

と、戍卒が一年交替で次々に入れ替わっているのは戍辺に支障を来すため、定住者ないしは長期服役者を選んで送るべきであるとしている。

戍辺期間は秦でも同じく一年であったため、このような事情は秦でも同様であつたろう。同じく史料Fでは、「秦の戍卒其の水土を能くせず、戍者辺に死に、輸者道に償る。秦民の行くを見ること、棄市に往くが如し」、『漢書』嚴助伝では、

越人逃入深山林叢、不可得攻、留軍屯守空地、曠日持久、士卒勞倦、越遁出擊之、秦兵大破、迺發適戍以備之。

と、秦の戍卒も土地や氣候に慣れず多くの犠牲を出したため、ついに謫を動員したとある。謫が一般の戍卒に代わって徴発されたことはこれらの記事から明らかであるが、ではなぜ彼らが選ばれたのであろうか。私見では大量の定住者や長期服役者を一般農民によつて編成された戍卒から徴発することは、農を傷つける危険性があつたためであると考ええる。謫対象者が一般農以外の人々で編成されていたことはすでに触れたが、翻つて言えば一般農民は謫の対象にはならなかったということである。元封四年（前一〇七）洪水により大量の流民が発生したとき、

關東流民二百萬口、無名數者四十萬、公卿議欲請徙流民於邊以適之。（『史記』万石君伝）

と、彼らを謫として辺に徙す動きがでたが、最終的には、

今流民愈多、計文不改、君不繩責長吏、而請以興徙四十萬口、搖蕩百姓、孤兒幼年未滿十歲、無罪而坐率、朕失望焉。（『漢書』万石君伝）

と、百姓への影響を懸念した武帝によつて否定されたことによつても、一般農民が謫の対象ではなかったことが分かる。このことから長期服役者を選ぶにあつて、農以外のもの、つまり謫該当者として列挙されている農民とは別に把握登録されている人々が対象になったのであろう。ただ「謫吏」や「嘗逋亡人」は過失分を償却すれば謫としての動員に従事し続ける理由を失うため、彼らが従事すべき任務は謫のなかでも長期服役者とは性格の異なるものであつたのではないだろうか。居延漢簡にみえる「謫吏」は時々に応じた必要労働、特に運送にあたっていたことはすでに述べたが、『史記』大宛伝の記事をみると、

發天下七科適、及載糒給貳師、輶車人徒相連屬至敦煌。

と、七科謫の対象者は敦煌までの輜重にも従事している。このことから謫によつて動員されたものは、おもに本来の懲罰と同様に一過性の労働に従事し、過失分を償却することによつて解放されたのではないだろうかと推測する。

## まとめ

本論では謫該当者が法的に罪人を意味したものとイえるかどうかを出発点とし、その語義に拘泥することを避ければ、彼らを罪人と規定する積極的証拠はなく、むしろ法制度や刑罰制度に矛盾するものであ

ることが確認できたと思う。さらに譴とは本来、過失とそれに対する懲罰以上の意味をもたないものであったことが居延漢簡の事例から明らかであり、国家による譴の動員は、当該機関に保持されていた懲罰権を中央が吸い上げることの意味していた。しかし譴該当者の多くには、過失という要素を持たない人々であった。そして彼らが徴発された原因は、彼らがもともと一般農民のように国家に対して必要業務を負担する存在ではなかった点にあり、彼らを徴発することは、国家が農民以外に大量動員できる集団を組み込んで行くことを目的とした。このように譴該当者には二つの要素が含まれていたのであるが、その比重はやがて後者の方が重くなっていったのである。つまり譴は、本来過失を国家的必要労働で償却する制度が、後に一般農民以外の集団を徴発、動員することを意味する表現に変化したものと考えられるのである。そしてそのような変化はおもに対外政策上の非常時を契機に急激に進行していったのである。以上から譴とは、国家による人民把握の徹底を背景に持つものであり、原則として農民のみを国家的必要業務負担の対象としていたそれまでの支配体制からの脱皮を推し進める急激な改革であったとも評価できるのではないだろうか。このように考えたとき、譴の問題はもはや法制という狭い領域で取り扱うべきものではなく、国制全般の問題として把握してゆかねばならなくなるであろう。

# 註

- (1) 代表的なものとして渡部武「秦漢時代の譴戍と譴民について」（『東洋史研究』三六巻四号 一九七八）、堀敏一 a 「漢代の七科譴とその起源」（『駿台史学』五七号 一九八二）、b 「漢代の七科譴身分とその起源—商人身分その他」（『中国古代の身分制—良と賤』汲古書院 一九八七所収）、越智重明「七科譴」（『戦国秦漢史研究』2 中国書店 一九八三所収）がある。

- (2) たとえば顔師古は「適、誼曰譴、譴有罪者。」（『漢書』南粵王趙佗伝）、杜預は「譴、譴責也。」（『左伝』成公十七年）とそれぞれ注釈する。

- (3) 西嶋定生「中国の歴史」2 秦漢帝国（講談社 一九七四）一九九頁

- (4) 西嶋定生「中国古代帝国の形成と構造」（東京大学出版会 一九六一）二四六頁

- (5) 堀前掲論文 a 六頁、b 一九七頁

- (6) 榎山明「秦漢刑罰史研究の現状」（『中国史学』五 一九九五）一四八頁

- (7) 罪人と罪人以外の人々が同所で就労していたことは以前に指摘した。

- （拙稿「秦代刑罰の再検討—いわゆる「勞役刑」を中心に—」『鷹陵史学』二四 一九九八 二九頁）

- (8) 但し用語のうえでは刑徒と譴には明確な区別があったことが大庭脩氏によって指摘されている（『漢の徙還刑』『秦漢法制史の研究』創文社 一九九二 一七〇頁）。それによると罪人を徙還する場合には「赦」しているのに、譴の場合には史料 A・D・E・F・H・I・J・K は「発」、B・G は「徙」を用いている。氏の指摘は、譴と罪人が徴

- 発の方法でも性格の異なるものであることを端的に示唆していよう。

- (9) 後段でも触れるが、「贅壻」以下を罪人とすることを否定する見解は以前からある（渡部前掲論文四二頁）。

- (10) 堀前掲論文 a 一五頁、b 二二三頁

(11) 足立啓二「中国封建制論の批判的検討」(『歴史評論』四〇〇 一九八三)、同『專制国家史論』(柏書房 一九九八)

(12) 小口彦太「中国前近代の法と国制に関する覚書」(『歴史学研究』四八三 一九八〇・三)、同「伝統中国の法制度」(『中国法入門』三省堂 一九九一)

(13) 榎山氏も、「彼等が謫(ツミ)の字を冠して呼ばれる理由を、身分的に差別されるが故に当時の一般人から罪あるものと見られたからだ」と説明することに、評者は疑問をもつ」とし、謫という呼称も国家との関係において考えるべきとの見解を示す(書評「漢代の七科謫とその起源」『法制史研究』三四 一九八四)。

(14) 「謫吏」のみに関してであるが、沈家本は「如秦漢之謫吏、随事謫発」と、必要に応じて徴発されていたことをすでに指摘している。

『歴代刑法考』分考 一二

(15) 後段で述べる長期服役者は実態として移住となるため、服役期間は事実上ないと思われる。

(16) 越智前掲論文五五五頁

(17) 『漢書』食貨志上「閭左之戍」に対する注

(18) 佐原康夫「居延漢簡に見える官吏の処罰」(『東洋史研究』五六卷三号 一九九七)

(19) 居延新簡引用にあたっては、甘肅省博物館ほか編『居延新簡甲渠候官』(中華書局 一九九四)の図版、釈文を参照した。旧簡は謝桂華ほか編『居延漢簡釈文合校』(文物出版社 一九八七)によった。

(20) 佐原前掲論文六頁

(21) 李均明「居延漢簡『適』解」(『文史』三三一 一九九〇)

漢簡所見適是一種対官吏所犯行政過失の処罰、所犯過失通常是未達到犯罪程度、但它也影響官吏政績的好壞。

(22) ここでは史に限定して論を進めているが、本簡の記載が官に就く前の経歴であること、及び後に引く『漢書』文帝紀の記事から、庶民も何らかの過失によって謫過が記録されていたのである。

(23) 佐原前掲論文五頁

(24) 以下雲夢秦簡を引用するにあたっては、睡虎地秦墓竹簡整理小組編『睡虎地秦墓竹簡』(文物出版社 一九七八)の釈文、解説を参照した。また引用に際しては本書の頁数を付した。

(25) 但し「贅壻」以下の謫過なく動員された該等者も恩賞の対象外であったどうかは不明である。

(26) 美川修一「漢代の市籍について」(『古代学』一五卷 一九六九)、渡部前掲論文

(27) 漢初から賈人には算籍が課せられていたが、武帝時代に楊可の告緡がおこなわれたことは、隱匿行為が日常的にあったためであると考えられる。謫の動員と告緡が期をほぼ同じくして実施されていることは、この時期彼らにあらためて国家的必要業務を強制的に負担させようとした動きの表れではないだろうか。

(28) 榎山前掲書評

(29) 唐の司馬貞「史記索隱」は諸説を「閭左謂居閭里之左也、秦時復除者居閭左、今力役凡在閭左者尽免之也、又云、凡居以富強為右、貧弱為左、秦役戍多、富者役尽、兼取貧弱者。」と整理している。

(30) 漢律佚文によると、

如淳曰、律、年二十三傳之疇官、各從其父疇學之、高不滿六尺二寸以下為罷癯。(『漢書』高帝紀上二年「五月、漢王屯滎陽、蕭何發關中老弱未傅者悉詣軍。」の師古注)

とある。疇とは、

如淳曰、家業世世相伝為疇、律、年二十三傳之疇官、各從其父学。

(『史記』曆書「疇人子弟分散」の集解)

とあるように代々父の元で家業に従事することを意味し、二十三歳になるとそれぞれ父の職業にしたがって傳される、つまり籍に登録されることが分かる。また『漢書』酷吏尹賞伝には、

維拳長安中輕薄少年惡子、無市籍商販作務、而鮮衣凶服甲鎧扞持刀兵者、悉籍記之、得數百人。

と、名籍を離脱して商業活動等に従事しているものを強制的に登録しているが、このことも彼らを職業別に名籍によって管理し、国家的必要業務の負担者として組み込んでゆこうとする国家側の意志を反映するものではないだろうか。

（31）濱口重國「秦漢時代の徭役労働に関する一問題」〔秦漢隋唐史の研究〕上巻 東京大学出版会 一九六六

（32）彼らは本来謫として動員される対象であつたとする見解もあるが（堀前掲論文 a 七頁、b 二〇一頁）、むしろ否定されている点に注目すべきだと考える。

（せがわ たかや 文学研究科博士後期課程東洋史学専攻）

一九九八年一〇月一四日受理